

2022年9月25日 主日礼拝

説教題「アロンがいる、モーセがいる」出エジプト記 4章 10～17 節

主任牧師 加藤 誠

「あなたにはレビ人アロンという兄弟がいるではないか。わたしは彼が雄弁なことを知っている。」「わたしはあなたの口と共にあり、また彼の口と共にあって、あなたたちのなすべきことを教えよう」(出エジプト記 4章14節、15節)

モーセが主なる神から「あなたにぜひ担ってほしい仕事がある」と、イスラエルの民のエジプト脱出という大仕事に呼び出された時、モーセは「わたしはいったい何者でしょうか」と言って尻込みしました。イスラエル人として生まれながらエジプト王女に拾われて王宮で育ったものの、エジプト人になり切れず、イスラエル人にも戻れない。「いったい自分は何者として、どこで生きていけばよいのか」という葛藤を抱えながらエジプトから逃げ出したモーセ。荒れ野を放浪しミディアンの部族に受け入れられ家庭を持ったもののミディアン人にもなりきれない。ますます「どう生きて良いか分からない」…虚ろな心を抱えたモーセがそこにいました。

けれども神は、そのモーセにこそ手伝ってほしい働きがあると言って、エジプトのファラオのもとで奴隷として苦しんでいるイスラエルの民を救い出す働きに召し出すのです。モーセにとってそれまでの 80 年の人生はイスラエル人としてもエジプト人としてもミディアン人としてもすべて中途半端であり、「迷いと苦悩ばかりの 80 年」だったわけですが、実は神はそのようなモーセをこそ用いる計画をお持ちでした。エジプトで奴隷となっているイスラエルの民を助け出すには、絶大な権力を持つファラオと対決しなければなりません。モーセは王宮で育ちましたから、ファラオがどういう人物であり、王宮の人びとがどういうことを考える人たちかを知り尽くしていました。またエジプトの奴隷でありながらも当時の都会の便利な生活に慣れ親しんでいたイスラエルの民は荒れ野の暮らしをまったく知りませんでした。モーセは荒れ野で羊を飼って暮らすミディアン人として、荒れ野の過酷さと共にそこで生き抜く知恵(どこで水を得て、どのようにして食糧を得ていくのか)を知り尽くしていました。そう考えますと、エジプトの王宮を知り尽くしていると同時に荒れ野の暮らしも知り尽くしているモーセこそ、神の計画を担うに最もふさわしい人物だったのです。モーセにとっては「自分の生きるべき場所はどこなのか？」と苦悩と葛藤に満ちたの 80 年が、実は「出エジプト」という神の大切な仕事のリーダーとして訓練されるための 80 年間だったのです。

私たちは多くの場合、神の計画を知りませんので、自分の「これまでの人生」を振り返っては「どうしてこうなんだろう?」「いったい自分は何をしてきたのだろうか?」と否定的に見てしまうことがあるわけですが、しかし神に無駄な計画はありません。私たちが神によって導かれたそれぞれの人生には必ず意味があり、神は「そのあなたに今日、これから担ってほしい働きがあるのだ」と私たちに招いておられ

るのです。これまでの歩みを振り返るときに「ため息」しか出てこないとしても、「神さま、この小さなわたしに何かあなたのお手伝いができるなら、それをさせてください」と祈っていきたいのです。

さて神の熱い招きに尻込みするモーセに、神は次々に使命に伴う「しるし」を見せます（4章）。モーセが手にしている杖を蛇に変え、モーセの手に皮膚病を生じさせてはきれいに治すという「しるし」です。けれどもモーセは「わたしは口が重く、舌が重い者です」となおも辞退の理由を語るので、神は「だれが人間に口を与えたのか。主なるわたしではないか」と言ってモーセを励まします。ところがなおも「ああ主よ、だれか他の人をお遣わし下さい」と泣き言を言い出すモーセにとうとう神は怒りだすのです。「あなたにはレビ人アロンという兄弟がいるではないか。わたしは彼が雄弁なことを知っている」「語るべき言葉を彼の口に託すがよい。わたしはあなたの口と共にあり、彼の口と共にあって、あなたたちのなすべきことを教えよう」と。

神は弱虫で、話すことが得意ではないモーセのために、兄弟アロンを用意しておられたのでした。先日、特別講演会に来てくださった大嶋重徳先生が日曜日の午後のランチタイムで若者たちに「教会はチームプレーだよ」と語り掛けておられました（巻頭言参照）。苦手なことは誰にでもある。チャレンジして失敗しても大丈夫。スベっても大丈夫。失敗して、スベって少しずつ苦手なことが克服されていく。でも、他の誰かにお願いすることも知っておくと良いよ、教会の働きは一人をするのではない、チームプレーだからと。自分には苦手なことを得意な人が必ずいるから…と。その大嶋先生の語りかけを聞く若者たちの表情がにこやかになるのを横で見ていると、わたしの心もうれしくなりました。

イスラエルの民の「出エジプト」はモーセ一人では担えないし、アロン一人でも担えない。モーセは神から言葉を託される預言者としての役割を。そしてアロンはそれを人びとに語る役割を。モーセとアロンが、それぞれお互いを必要とする関係の中で、一緒にチームとされていくのです。そしてチームとされた二人に「なすべきこと」（15節）として託されたのはどのような仕事だったのでしょうか。

第一には超大国エジプトの強大な支配のもとで過酷な強制労働を強いられていたイスラエルの民を助け出すこと。第二にはそのイスラエルの民が荒野の旅を通して、聖書が証しする主なる神さまを礼拝することを学び取っていくよう導くこと。そして第三にはエジプトのファラオという地上の強大な権力者（頑迷に富と武力に固執して手放せない者）に、私たち人間が真に畏れるべき方、そして従うべき方を証ししていく働きです。いずれも今日、私たち教会に託されている働きと言ってもよいかもしれません。私たちがこの世界で大切に受け取り、従っていくべきもの。聖書が証しする神の愛と真実と希望。この神にこそ、私たちを罪の力から解放する力があるのです。その大切な働きを担うチームとされていきたいのです。